

天草大江地区における道に着目した景観の変遷に関する研究

Study on transition of landscape focusing on road system in Amakusa Oe district

熊本大学大学院自然科学研究科社会環境工学専攻

原田 茉林

1. 序論

隠れキリシタンの里として観光地にもなっている天草町大江地区は、現在、過疎化や少子高齢化などによる人口減少という問題を抱えている。それに伴い、段々畑などの景観も失われつつある。そこで本研究では、今後も住民同士で共通の認識を持って景観を守っていくために、道に着目して景観の変遷を整理することで大江の景観の構成を理解し、その景観の構成と保全に対する課題を地域住民の間で共有することで、今後の文化的景観の保全に役立てることを目的とする。

2. 大江地区における景観構成要素の把握

現在の大江地区の景観を理解するために、景観を構成している要素を全て抽出し、図1に示した。これを用いて、要素の関係性を分析する。それにより、道の持つ最も重要な役割として、各要素をつなぐものである、ということがまず挙げられる。各景観構成要素を、自然系資源・生業系資源・集落系資源と分けた際、道の中でも、幹線となる国道は、どの分類にも属さなかった。道幅の比較的狭い支線や生活道では、同じ幅の道でも、家々の間にあればその道は集落系要素に、畑の間にあれば生業系要素になることから、周辺の要素によって属性が変化することがわかる。以上より、道は、大江の景観を構成する

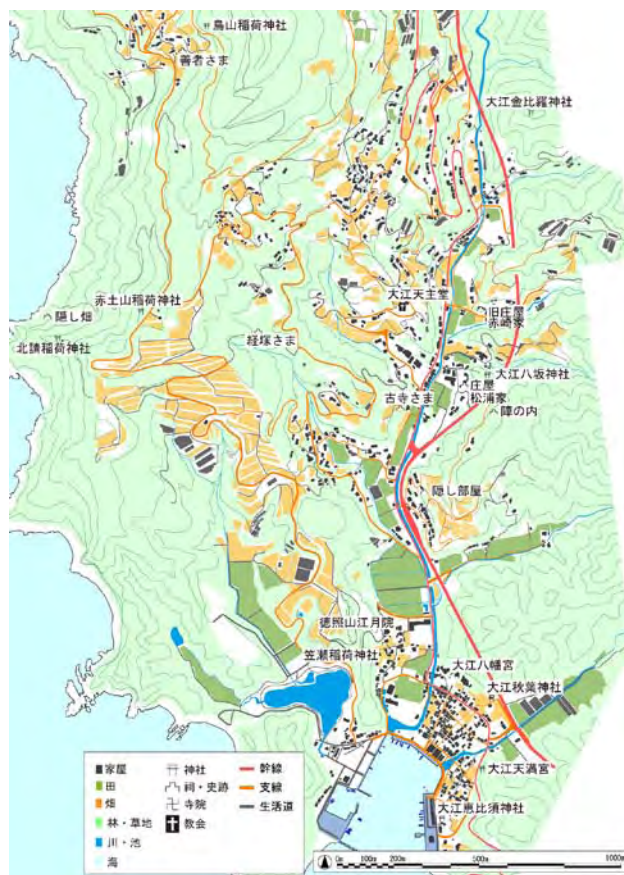


図1 現在の景観構成要素の分布と道の分類

要素をつなぐ骨格であることがわかる。

3. 歴史からみた道の変遷に関する分析

大江の歴史的背景を把握し、江戸時代・戦後復興・現在の3期に分けて、景観構成要素と道の変遷を整理した。これより、徒歩での往来のある道が、大江の歴史的な遺産として価値があることが明らかになった。

4. 景観保全における道の重要性に関する分析

道からの景観を見直すために、視点場としての道に着目し、道から見える景観を整理する。視点場はそれぞれ、教会を中心に周辺の集落や山々を臨むポイント、眼下に広がる段々畑と遠くの山に見える海を臨むポイント、自然の岩場と広大な海を臨むポイントの、3種類に分けることができた。写真1は、教会を臨む最も代表的な視点場である。これを元に、2章と同様に景観構成要素の分類を行った(図2)。以上より、大江の景観保全を考える上で、景観を臨む場所としての道が重要であることが明らかになった。



写真1 大江天主堂を臨む主要視点場

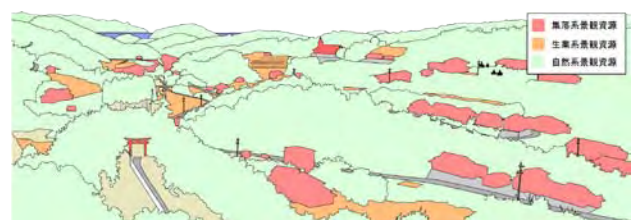


図2 写真1を景観構成要素に色分けしたもの

5. 道を基盤とした文化的景観の保全活動に関する考察

地域住民ともに道を歩き、発見した風景を共有するワークショップを行った。これより、道を歩き、そこで交流が生まれることが道の保全につながり、風景の保全につながることを示した。

6. まとめ

本研究では、道に着目して景観の変遷を整理することで大江の景観の構成を理解し、その景観の構成と保全に対する課題を地域住民の間で共有することで、文化的景観保全のあり方を考察した。以上より、道の保全、すなわち道を歩く人々の間で自然に交流が生まれる健全な社交の重要性を述べた。今後は、詳細な道の使われ方を調査し、具体的な保全方針を模索していくことが、本研究における課題である。